

編集後記

本年度は、創立者と歴史学者のアーノルド・トインビー博士との対談を収録した『二十一世紀への対話』発刊40周年にあたる。本学でも記念事業の一環として、「池田大作とA.J.トインビー展」を開催した。さらに、我が国におけるトインビー研究の第一人者として著名な吉澤五郎氏（聖心女子大学名誉教授・トインビー・地球市民の会特別顧問）に御講演をいただき、トインビー博士の研究及び日本との関係についてのお話を頂戴することができた。元外務省主任分析官であり、文筆家として活躍する佐藤優氏にも池田・トインビー対談の今日的意義について歴史的な観点から御講演をいただいた。お二人には心より感謝を申し上げる次第である。

本紀要では、毎年、大学の主要な式典における来賓の祝辞を特別講演として掲載している。本号では、フィリピン共和国の最高裁判所元長官であるヒラリオ・ダビデ氏の第41回創価大学卒業式での祝辞、ウズベキスタン元文化・スポーツ大臣のクジエフ・トゥルスナリ・カーリモヴィチ氏の第45回創価大学入学式での祝辞、そしてハーバード大学のヌール・ヤーマン博士の第45回創大祭・第31回白鳥祭「創価栄光の集い」での記念講演の合計3本を収録している。いずれも、これからの創価大学の社会において担うべき責務や使命、人間主義のあり方について新たな視座を提供する意義深き講演であった。

論文は、1本収録している。台湾の文化大学の元学長であり、本学の名誉博士でもある中国文化大学池田大作研究センターの林彩梅氏が創立者の世界市民教育観について分析し、考察を加えている。

講演は、学内外の講演者より5本収録した。まず、神立講演では創価教育学会の歴史について検討・紹介されている。吉澤講演と佐藤講演は前述したように池田・トインビー対談の『二十一世紀への対話』出版40周年を記念しての講演となり、当日は学生だけでなく本学の教職員も詰めかけるなど、参加者の興味関心の高さを感じさせる貴重な講演であったといえよう。現在、創価女子短期大学の学長である石川氏の講演では、氏が日本語別科の研究科長であった草創期の大学について言及されている。本研究所の所員である伊藤氏の講演は、在外研究の地であるドイツで創価教育（価値創造の教育）についてスピーチをしたものであり、今回は日・独両語で掲載した。

高橋報告では、中国における池田思想研究の動向について掲載されており、今年で12回目を迎える。台湾でおこなわれた「第9回池田大作平和思想研究国際フォーラム」のほか、広東外語外貿大学での「2015池田大作思想シンポジウム」や新設の池田大作研究機関についても紹介されている。資料紹介としては、月刊誌『教育界』に掲載された教育茶話会記事を収録している。こちらは、『創価教育』第7号に掲載された資料の続編となっており、牧口研究を考えるうえで貴重な歴史的資料といえよう。

以上のように概観してみると、今回は、記念講演、学外識者の講演も含めると合計8本の講演を収録することとなり、非常に読み応えのある号になったといえよう。また、掲載された執筆者や講演者の国名もフィリピン、ウズベキスタン、アメリカ合衆国、

台湾などグローバルな広がりを感じることができる。本学の主要な式典も大学アーカイブの一部としてとらえることとなるため、特に記念講演の収録は、今後も継続しておこなっていく予定である。来賓が残した本学学生、また創立者へのメッセージを記録していくという試みは、創立 50 周年を間近に迎える今後の本学の発展を展望するうえで必要な作業となっていくに違いない。

また、創価教育や池田思想についての研究が展開されている様子は林氏の論文や高橋氏の研究動向、また佐藤氏の講演からも読み取ることができ、今後、世界で行われている創価教育に関する実践や研究をまとめ、正確に残していくことの必要性を痛切に感じる次第である。創価教育は固定化された概念ではなく、国や文化、そして実践する人によってもさまざまな形に応用・解釈されえるものであり、さらに変革、発展を続けていくことで新たな価値を生み出す思想ともいえよう。本研究所はその研究の一端を担うべく、今後も海外諸機関との連携を取りながら、研究に精進して参る所存である。読者の皆様方にも御批正を頂きつつ、さらなる充実化を図って参りたい。

最後に今回の紀要作成に際し、紀伊國屋書店をはじめ御協力・御尽力いただいた方々に、この場を借りて篤く御礼を申し上げたい。

2016 年 3 月 16 日 (M.N, H.T)